桐生悠々と「発言」

名古屋は昨日からノーベル賞の受賞ニュースで沸いている。ここでは歴史を遡って、これも名古屋に関係の深い「抵抗の新聞人 桐生悠々」をとりあげたい。名大図書館で太田雅夫編『桐生悠々反軍論集』新泉社、1980 年を見つけた。写真は本書に掲載されていた「晩年の桐生悠々 1940 年頃」である。

長文の解説のなかで、太田は「軍部、官憲の烈しい弾圧にも屈せず、小冊子『他山の石』に立てこもり、頑強に「良心の灯」を守りつづけ、死の床につくその日まで「地の塩」としての役目を果した、ジャーナリスト悠々、自由主義者悠々こそ、まさに 10 年、20 年いな 30 年後である今日の在り方を敬示した予言者的警世の人であったといっても過言ではあるまい」と述べている。本論集は悠々が『信濃毎日新聞』「評論」および『他山の石』で執筆したものを収録したものである。

桐生悠々については、先のレポートで 1988 年の演劇「出演」で紹介した。この論集に目を通して、あらためて「抵抗の新聞人・ジャーナリスト桐生悠々」の現代的意義を考えさせられた。そんな折に、中日新聞が 9 月 11 日に「桐生悠々を偲んで」という社説を掲載した。この社説を読んで、懸念している新聞の危機を「発言」しようと思い立ち投稿した。たぶん掲載されないと思いつつ、連絡を心待ちにしていたが、残念ながら掲載されないようだ。それでレポートの場にて、桐生悠々を偲びつつ、現在の「新聞の危機」について「発言」しておきたい。

本紙 9 月 11 日社説「桐生悠々を偲んで」は、現在の日本を考えるうえでも示唆に富む。悠々の言葉「言わねばならぬこと」が、安倍政権だけでなく新聞についてもある。

遅きに失した「誤報謝罪」会見以降も、朝日新聞への激しい攻撃はやまない。政治が直接介入する事態も懸念される。これは朝日新聞だけではなく、新聞界全体の問題だ。一部新聞の過剰な「朝日批判」は新聞自体の信頼を揺るがしかねない。まさに新聞、言論の危機だと考える。

新聞の原点は、もちろん事実を正確に伝えることだ。それと「時の権力」を監視し、批判すべきことはしっかり批判することも欠かせない。新聞をはじめとしたメディアの萎縮を恐れる。本紙が鋭く説いてきたように、日本は「戦争する国」へと危険な道を突き進んでいる。「抵抗の新聞人」桐生悠々の言葉のように、今こそ「起てよ全国の新聞紙」である。新聞の真価が問われている。新聞を愛する読者も黙ってはおられない。

（2014 年 10 月 9 日）